

性的マイノリティによる越境的社会空間の形成

—日本における中国出身留学生たちの社会運動参加の経験から—

孟 令 齐

本稿は、中国出身の性的マイノリティ留学生を対象とし、日本への移住動機、ジェンダーとセクシュアリティに関する知識および社会運動との関わりを検討した。まず、移住の動機について、出身国の中国において草の根の運動に参加した経験が、その後移住先の日本での経験と連続していることを明らかにした。次に、中国と日本を行き来する往還的移動によって、かれらが日本の経験を捉え直すという両義的経験をj得ていることを明らかにした。プライドパレードの参加事例をもとに、日本の性的マイノリティの社会運動との関わりを考察することで、かれらが移住国において単に学びを受容するだけでなく、批判的j眼差しを向けていることを取り上げた。本稿は、性的マイノリティの留学生による社会運動参加の経験が、かれらの問題意識を形成し、中国への問題関心を出発点とした越境的社会空間を切り開く契機となることを示した。

1990年代から新たな研究領域として確立されてきたクィア移住研究は、その対象が欧米諸国への移動事例に限定されがちである。日本在住の中国出身性的マイノリティの留学生を対象とすることで、本稿は、性的マイノリティの移動過程には、単なる「抑圧から解放へ」という物語に回収されない複雑性があることを示した。

キーワード：性的マイノリティ, 中国, 越境的社会空間, 社会運動, クィア移住

はじめに

中国から海外への移民¹⁾は、1990年代以降、留学移民が中心を占めてきた(張 2001)。かれらは越境者として海外で学ぶ経験を通じ、出身国と移住国双

方の社会と接点をもつようになる。双方の社会に多様な影響を与える越境移動者のトランスナショナル視角（小井土 2005: 395）に着目し、本稿は、日本に移住した性的マイノリティの中国人留学生が、いかに日中双方の社会運動に関わっているのかを検討する。このため、本稿が対象とするのは、社会運動に強い関心をもつ中国人留学生である。二つの社会の間の往還的な移動経験を契機として、かれらによる越境的社会空間はどのように萌芽しつつあるのかを論じていこう。

人々の越境をセクシュアリティとの関係から考察するクィア移住研究（queer migration studies）²⁾ は近年、新たな研究領域として勃興してきたが、先行研究の多くは主に欧米諸国を移住国とする事例に限定されてきた。本稿は、中国から日本への移住事例を検討することで、「欧米に向かう性的マイノリティの移民」という定式化からはこぼれ落ちる存在に光をあてる。この定式化には、性的マイノリティの移民が「同性愛嫌悪的な出身国」から「LGBTフレンドリーな移住国」に向かって移動するという想定が孕まれているが、欧米諸国を「人権先進国」とする単線的な進歩史観は再考される必要がある。よって本稿は、性的マイノリティの移動をめぐる「抑圧から解放へ」といった解放の物語（Ahmed 2010）に回収されない多元的経験に注意を払い、かれらの経験を描き出していく。

1. 先行研究

1.1 セクシュアリティと移動に関する研究

国際移住研究において、移民の主体が「男性」であることを自明視する想定は、1970年代以降、女性学研究において問い直されるようになってきた。1990年代以降、国境管理の統制に直面した移民女性内部の格差も浮き彫りにされた（青山・森 2023: 371）。こうした研究の蓄積をさらに発展させる形で、学問として確立され、理論化を進めてきたのがクィア移住研究である。クィア移住研究は、国際移住研究における「移住する人＝異性愛者」、セクシュアリティ研究における「クィアな人＝市民（移民ではない人）」という従来の学問の支配的枠組みを捉え直す知見を提供し、クィア研究と国際移住研究を交差させた学問分野である（工藤 2022: 51）。以下では特に、移住を通じた新たな自己理解の促進に注目したクィア移住研究の蓄積を取り上げ、実証研究でいまだ十分活用されていないトランスナショナル視角について整理する。

クィア移住研究は、移動に伴う性的マイノリティ移民の新たなアイデンティティ交渉を明らかにしてきた。1980年代以降、「保守的な」農村で抑圧を受け

性的マイノリティが「進歩的な」都会へとセクシュアル・アイデンティティの探求のために移動し、ゲイコミュニティを形成する過程について捉えるようなセクシュアリティ研究が登場するようになった (D' Emilio 1989; Parker 1999; Rubin 1993 = 1997; Wetson 1995)。クィア移住研究は、こうした研究の流れを汲みつつ、次の二点を重視している。第一に、セクシュアリティを動的に把握するために、人々が能動的な主体として移住を行い、自らのセクシュアリティと交渉する方法に目を向けることである (Povinelli & Chauncey 1999)。第二に、移住先での新たな自己理解と欲望に取り組むことである。L. Knoppは地理学的観点から、移動をアイデンティティの探求に結びつけ、自己実現が可能となる新たな場所の創出がもたらされることを論じた (Knopp 2004: 123)。これをふまえ、A. Gorman-Murrayは移住のパターンや経験の多様性を発見し、「身体化されたクィアアイデンティティの探求」(embodied queer identity quest)として「クィア移住」を定義づけ、複数の経路と移動が生み出される可能性を示唆した (Gorman-Murray 2007: 112)。これらの研究は、性的マイノリティの越境的経験とアイデンティティの関係を扱っており、移住によるセクシュアリティとの交渉を主に身体と情動、都市空間との関わりから問うている。本稿では、従来こうした研究では論じられてこなかった社会運動を視野に入れ、性的マイノリティによる越境的なつながりを考察するためにトランスナショナル視角を援用する。

1.2 トランスナショナル視角

従来移民研究は、主に受け入れ国に焦点を当て、移民統合を分析してきた。これに対し、トランスナショナル視角とは、移民による往還的な移動に注目し、移住国だけでなく、出身国に果たす影響をも捉える点に特徴を持つ。このような視座を切り拓いた研究として、G. Schillerらによる在米カリブ海地域出身移民の研究がある。かれらは、出身国との政治的紐帯を維持し、政治的関与を行うことで新たな社会空間を創出する移民の姿を描き出した (Schiller et al 1992)。以後、移民が国家の政治に対してオルタナティブな社会空間を構成しようとする傾向に関する研究が蓄積されていくことになった (大井 2006: 149)。

しかしながら、クィア移住の実証研究においては、移民が多様な形で出身国に関与しつづけることに着目するトランスナショナル視角が十分に用いられてきたとは言い難い。トランスナショナル視角の重要性は、歴史的観点からクィア移住研究を牽引してきたE. Luibhéidも強調している。この視角は、国家権力の影響を受けつつも、出身国と移住国を往還する中で、社会空間を構築して

いる能動的な主体として移民の経験を十全に捉えようとする点に意義をもつ (Luibhéid 2014: 122)。Luibhéidに倣い、本稿はトランスナショナル視角を援用し、性的マイノリティが、出身国中国の国家権力の影響を受けつつも、いかなる越境的社会空間を形成しているのかを考察していこう。

1.3 中国出身の性的マイノリティ移民に関する研究

中国出身の性的マイノリティ移民に着目した既存研究には主として二つの特徴がある。第一に、人種とセクシュアリティの交差の視点から移住後の生活に焦点を当てていること、そして第二に、移住の決断がもたらす意義を論じていることである。

一点目については、ロンドンに移住した香港出身のゲイ男性の移住後の状況を、エスニックマイノリティと性的マイノリティという二つの社会的立場から分析したKong (2011)の研究や、オーストラリアに暮らす中国人ゲイ男性を、人種差別を乗り越える「創造者」として描き出したWongら (2021)の研究が挙げられる。一方、越境の歴史的文脈に結びつけて、オーストラリアに移住した中国人ゲイ男性の経験の変化を考察したBao (2013)の研究もある。これらの研究群は、二重のマイノリティ性によって、移住国で周縁化される経験に焦点を当てている。

二点目については、KamとChoiの論考がその例として挙げられる。中国出身のクィアと自認する女性たちに聞き取り調査を行ったKam (2019)は、海外に移住するモビリティ³⁾を発揮することが異性愛規範に基づいた社会の要求と交渉する新たな戦略となることを発見した。Kam (2019)の洞察を補完する形で、Choi (2022)はゲイ男性を対象にした研究で、グローバルな多重移住⁴⁾が中国で受けた国家と家族の圧力に直面するための対処法となることを示した。これらの研究群は、出身国で受けた抑圧に対処する行為として移住を捉えるものである。

だが、移民は移住国で周縁化されるだけの存在ではないし、かれらの経験は移住によって出身国の抑圧から逃れれば終わるようなものではない。本稿は、移住国と出身国の間を往還する移動経験に着目することで、出身国で新たな啓発を受けたり、移住国に問題点を発見したりするような両義的経験を重視したい。

さらに、性的マイノリティの留学生に着目した既存研究は、欧米諸国への移住事例に偏重してきた。Zheng (2022)は、コロナ禍におけるオーストラリアの中国人留学生によるSNSを用いた自己開示の過程を明らかにした。Boyd & Wei (2023)は、ニュージーランドに留学した性的マイノリティの女子学生が

クィアアイデンティティを開示できる家族類似的なつながり (family-like connections) を構築していく過程を描いた。こうした研究群は、移住国で性的マイノリティの留学生による周囲との関係性構築を解明しているが、性的マイノリティが越境性を活かして新たな知識を獲得したり社会運動に関与したりする側面は検討されてこなかった。

したがって、本稿では、トランスナショナル視角に基づき越境的社会空間 (Faist 2000) の検討を行う。移住国である日本だけでなく、出身国である中国での経験もつぶさにみることで、「抑圧から解放へ」という図式を超えた両義的経験を描き出す。そのうえで、性的マイノリティの留学生が往還的移動経験を通じて、社会運動といかに関わり、越境的社会空間を生成しているのかを明らかにしていく。

2. 研究の背景, 対象と方法

2.1 研究の背景

性的マイノリティの留学生の社会運動への関わりに注目する本稿は、社会運動がナショナリズム・イデオロギーによって規制を受けている中国特有の背景を有している。この点は調査においても、対象者が繰り返し言及する認識的前提であるため、本項で説明しておきたい。

近年、中国で社会運動⁵⁾が規制を受けている背景には、ナショナリズム・イデオロギーがある。そもそも社会運動と関わるアクターとしてのNGO団体は、海外資金から援助を受けることから、その政治的立場が疑われてきた (木 2014)。つまり、海外から資金を得るNGO団体は、国家の安全の脅威となる「海外勢力」が入り込む可能性を有する存在とみなされるのである (孟 2022)。中国では、フェミニズムや性的マイノリティの運動も同様に、西洋由来の運動と思想であるとみなされ、ますます取り締まりが加速している。Guo (2018) によれば、「同志」⁶⁾運動を担うNGO組織は、「民主」や「平等」を掲げる運動であることから、国家によって危険視されている。2017年には、中国政府が海外NGOに対してその活動を抑制しようとした結果、国内の「LGBT NGO」は唯一の海外NGOからの資金源を失うことになった (Wang 2021: 94)。このように、性的マイノリティは中国の土壌と資源を用いてコミュニティ形成と運動を行っていくことが容易ではない状況に置かれている。性的マイノリティはいずれの社会でも周縁化されがちであるが、本稿の対象者がこうした中国特有の背景をもった存在であることには留意すべきである。

2.2 研究の対象

先述の通り、中国では、性的マイノリティの運動を牽引してきたNGO/NPO団体の活動が大きく制約されている。この国家規制の中で、中国の性的マイノリティの国境を超えたつながりと創造的運動を探索することは、喫緊の課題となっている（Liu & Rofel 2010; Wang 2021）。現在、社会運動の担い手は、日常的で個人的な人間関係の中で、表面的にはその存在が見えないゆるやかな「隠れたネットワーク」を形成する傾向にある（田中 2018: 7）。本稿が対象とする性的マイノリティの在留資格は、留学もしくは留学から就労に移行した人々であるが、性的マイノリティ移民として、留学生を対象とすることはこの「隠れたネットワーク」の形成を観察する上でアドバンテージをもっている。なぜなら留学生は、移住国で学ぶことを基盤にしながら、人的関係資本の蓄積を目指してネットワークの構築を積極的に行っているからである。本稿は、かれらが現代中国における社会運動を切り開く可能性をもった存在であることを示していく。

研究対象とする中国人留学生の日本移住の歴史的背景についても簡単に説明しておこう。中国から日本に留学する移民の増加を歴史的にみると、1980年代から、中国国内における社会移動が制限される中で、海外への出国欲求は強まり、出国者数が急激に増加した（坪谷 2008）⁷⁾。同時期に、日本政府は「留学生受け入れ10万人計画」を打ち出し、留学ビザの申請手続きを簡素化した（Wakabayashi 1990）。こうした流れが、現在日本において中国人が最多数の外国人集団になった土台を形作った（Kovrigin 2013: 225）。2023年度の調査によると、日本における中国人留学生⁸⁾は115,493人であり、2位のネパール人留学生の約3倍である（独立行政法人日本学生支援機構 2023）。

2.3 研究の方法

本稿は、聞き取り調査により得たデータに基づき、性的マイノリティの中国人留学生による移住動機および社会運動参加の事例を考察する。

筆者自身も、一人の留学生として、日本で性的マイノリティの研究に取り組みつつ、学問と社会運動に惹かれ、関心を抱く調査対象者に会ってきた。対象者には、あらかじめ調査の趣旨を伝えたくて、ラポールを十分形成してから、同意を得てインタビュー調査にのぞむことを心掛けた。調査は、2022年9月から2024年2月にかけて、半構造化インタビューとして実施した。移住の動機、自身のセクシュアリティをめぐる認識過程、日本での就学/就労経験、社会運動との関わりに関して、一人当たり1時間以上聞き取った。インタビューは中国語で実施して録音し、音声データからトランスクリプトを作成した後に

項目ごとにコーディングし、データ分析を行った。

調査対象者の語りには中国の政治状況に対する思いが含まれているため、昨今の国家規制の強化に鑑みて、最大限の配慮を行う必要があった。このため、個人を特定しやすい情報はすべて削除するか、別の表現に差し替え、本調査の概要一覧表（表1）には調査対象者のジェンダー、セクシュアリティに関わるアイデンティティを明記しないことにした⁹⁾。理由は以下の2点である。第一に、留学生のコミュニティがかぎられている中で、調査対象者のジェンダーアイデンティティおよび性的指向を明記することが個人の特정에最もつながりやすいこと。第二に、性的マイノリティ移民の社会運動経験に着目するという本稿の目的に照らし、非規範的とされる性を生きる——つまり、シスジェンダー、異性愛に当てはまらない生き方をする——人々を調査対象者の要件としたこと。語りを理解するにあたって、個々の具体的なジェンダーアイデンティティと性的指向に関する情報が必要な場合には、文中において会話の文脈に合わせて提示する。なお、ジェンダーアイデンティティと性的指向は全て調査時点で自認されたものである。

表1 調査対象者一覧

	年代	在留資格	来日年数 (2024年2月時点)	調査時間	調査実施時期
A	20代	留学	2年	2時間30分	2024年2月
B	20代	留学	2年	4時間15分	2023年10月
C	30代	留学	2年	1時間30分	2023年9月
D	20代	留学	4年	1時間36分	2022年12月
E	20代	留学	2年	2時間16分	2023年8月
F	20代	留学を経て 就労	3年	2時間43分	2023年7月
G	20代	留学	5年	2時間19分	2022年9月
H	20代	留学	3年	1時間23分	2023年2月

3. 中国と日本で育まれる政治的な問題意識

3.1 日本への移住動機

本項では、中国出身の性的マイノリティ留学生の移住動機を見てみよう。調査対象者のうち4名が中国国内で日本語を専攻にしたことを理由として留学の動機を語った。日本語専攻という以外にも、4名が、日本の小説やサブカルチャーへの関心を来日動機として述べた。こうした移住動機は、従来の中国留学生移民と重なる部分があるものの、実は、ジェンダーとセクシュアリティに関わったり、あるいは中国国内で社会運動から得た経験と関連したりしている。以下では、事例分析を通じて、性的マイノリティの移民が「同性愛嫌悪的な出身国」から「LGBTフレンドリーな移住国」に向かって移動するという「抑圧から解放」の定式化を捉え直してみたい。

Hさんは、留学を通じて自分が「良い学歴を獲得できた」が、それは親へのカミングアウトにも関連していた。Hさんによれば、「私がゲイだとしても、学歴を入手できたら、親に恥をかかせないことになる」。つまり、Hさんにとって、学歴の上昇を図れば、両親が自分のセクシュアリティを恥じないことになる。このような、Hさんの留学動機の意味づけは、Kamが指摘した中国におけるレズビアンによる家族との交渉戦略に通ずる部分がある。Kamによると、自らのセクシュアリティを家族に開示する際に、レズビアンは物質的な現実(material reality)を重要視し、経済的能力があることを親に証明する(Kam 2012: 75)。Hさんの語りにおける留学を通じた学歴上昇も、こうした物質的現実の達成と不可分の関係にある。親に自分のセクシュアリティを開示する切実な思いを語るHさんにとって、親へのカミングアウトは一種の「解放」を意味する。そしてこの場合の「解放」とは、出身国における私的領域の家族と深く関連したものである。この事例は、性的マイノリティにとっての「解放」が必ずしも移住国においてのみ達成される経験ではないことを示している。

次に、社会運動参加の経験をもつGさんとBさんの事例に着目する。Gさんは、中国国内で#MeToo運動¹⁰⁾と関わる経験から、留学を考えたという。

2018年に、国内でme too運動に大勢が参加するようになって、私も関わりながら、通っている大学に色々提案しました。最初は大学側も聞いてくれていたけれど、徐々におそらく国家がこの運動には何かしら問題があると定義づけ始めたことによって、学校側は全く聞く耳を持たなくなりました。約束していたことも全部果たされなくなって。私は本当に憤りを感じて、ここにいるのも退屈だと思っていた頃に、ちょうど交換留

学の機会が回ってきたから、日本に来たんです。

Gさんは当時大学に対して、セクシュアルハラスメントの防止策の交渉を行っていた。そして、「国家がこの運動には何かしら問題があると定義づけ始めた」背景には、2015年3月、5人のフェミニスト活動家がセクシュアルハラスメントに反対する企画を公共交通機関で行い拘束された事件があった。この拘束に対して、外国の社会運動団体が釈放の要請を行い、それ以来中国におけるフェミニズム運動は政府にとってセンシティブな社会問題として認識され始めた。その結果、多くのフェミニスト団体の活動の展開が困難となった(Xiong & Dušica 2021)。前節でも述べたように、国家は、社会運動に対して、海外輸入の思想が入り込む可能性を危惧し警戒しているのである。国家の指示を受け学生の要望に対応しなくなった大学に失望し、日本留学を決意したGさんの事例は一見、「抑圧から解放」に当てはまる。しかし、留学後、ジェンダー研究を始めたGさんは、自身に関心を持ち始めた理由を中国国内での経験に関連づけて述べていた。

<いつからフェミニズムに関心がありましたか？>¹¹⁾ 高校のときでした。微信（引用者注：中国のSNSである）でフェミニズムを紹介している公式アカウントを見て、沢山の文章をそこで読んで、勉強しました。大学に入った後、自分もなんとか参加してみたいと思って、LGBTの運動も関わっていたし、フェミニズムも。<興味をもった理由は何ですか？>自分と密接に関わることだし、自分の困惑が解消されたと感じるから。解放されていくように感じて、ますます好きになっていきました。

国家はフェミニズム運動を規制する方向で動いていたのだが、Gさんの事例は、中国におけるジェンダーとセクシュアリティの運動の蓄積によって、エンパワーメントされたことを示唆している。国家によるフェミニズムの規制を受け、民間もそれに合わせて確かに抑圧の方向に働きかけたが、中国国内の草の根の活動家の取り組みは一方でGさんに啓発を与えた。Gさんの事例が示唆するのは、出身国での経験を、国家レベルにのみ照準して「抑圧的」とみなすことの危うさである。そうした単純化は、民間レベルの草の根の運動の蓄積を覆い隠し、不可視化してしまう。性的マイノリティにとって出身国での経験を一概に「抑圧的」と語ることには注意が必要であり、生きられた経験をつぶさに検討することが不可欠なのである。このようにGさんの事例は、「抑圧から解放へ」という定式が定着することの危険性を示している。

一方、Bさんは、中国の地下クラブでドラッグショーを鑑賞し、「自分らしく自分を表現するパフォーマンスに感銘を受けた」ことがエンパワーメントにつながったと語った。そのことをきっかけに、その後Bさんは日本でセクシュアリティの研究を始めた。Bさんは、出身国である中国の地下クラブの取り組みに触発されたため、「抑圧から解放へ」の構図が当てはまらない。中国で受けた啓発の延長線上に、日本でセクシュアリティの研究を決意したBさんの語りが見えるように、出身国の経験は移住国の経験と連続したものとして存在しているのである。

以上のように、性的マイノリティによる移動の過程には、単なる「抑圧から解放へ」という構図で語り尽くせない複雑さがある。さらに、GさんとBさんの事例が見えるように、ジェンダーとセクシュアリティの問題や、社会運動に対する関心は、中国での経験によって培われており、移住動機を形作っただけでなく、その後の移住国での活動にも影響を与えていた。上述の事例はいずれも、「非異性愛者のアイデンティティと実践に対するニーズがある場所を離れ、特定の行き先に向かう」という移動過程に関与する」というクィア移住（Gorman-Murray 2009: 443）の事例として捉えられるが、こうした定義を拡張する必要性を提示している。すなわち、性的マイノリティの移動を形作る出身国と移住国の経験は、「ある場所を離れ、特定の行き先に向かう」といった断絶的なものではない。むしろ、出身国で積み重ねた経験は、移住を動機づけ、移住国との連続体上にあるものとして、性的マイノリティの移住後の生活を形成する土台となるのである。このような連続体をなす経験について、次節では往還的移動に注目しながらさらに論じていく。

3.2 中国と日本を往還する学びと社会運動との関わり—両義的経験に注目して

3.2.1 知識に触れることから得た変化

本項では、中国出身の性的マイノリティ留学生がジェンダーとセクシュアリティの知識を獲得しつつ、中国と日本を行き来する往還的移動を通じて両義的経験をもつ様子を見ていこう。

聞き取り調査では、Aさん、Cさん、Dさん、Eさん、Hさんは、大学でジェンダーの授業を履修したり、性的マイノリティのサークルに参加／ボランティア活動を始めたりしており、知識とコミュニティから啓発される経験をあげていた。そして、Gさんは、大学でジェンダーの授業を履修することで、自分に対して新たな理解を得た。中国にいた頃の経験と対比しながら、Gさんは以下のように話した。

国内で学生だったとき、自分が「跨性別」(引用者注：中国語でトランスジェンダーを指す用語)なのではないかとずっと悩んでいました。(…)
X大(引用者注：Gさんが進学した日本の大学)に入ったら授業でいろんな概念を知り、わかるようになりました。自分はただ理想的なジェンダー規範に当てはめようとしただけだということがわかりました。自分のことをもっと知るようになったから、もう今は悩まず、迷いません。

Gさんはこのように、授業の中で自分が「トランスジェンダー」ではないことがわかるようになり、ジェンダーアイデンティティをめぐる自身の感覚を把握し、それ以前の違和感をはっきり言語化できた。Gさんと近い経験として、Dさんも授業や性的マイノリティを対象にした講演イベントに参加したことをきっかけに性別二元論の枠組みを問い直す「ノンバイナリー」概念に出会った。Dさんによれば、自分がこれまで求めてきたジェンダー表現を説明するカテゴリーとして、「ノンバイナリー」が自身の感覚にじっくりきたという。

従来の先行研究で指摘されてきたクィアアイデンティティの探求について、本稿の事例は、留学生が単に知識を得るだけでなく、自身のこれまでの生きられた経験に取り入れながらセクシュアリティの自己探求を行っていることを示している。しかし、こうした知識の伝達は、移住先の日本でのみ実現されているわけではない。以下、Bさんの事例を中心に検討する。

留学前から中国のドラッグショーから「感銘を受けた」Bさんは、来日後も長期休暇を利用し中国国内の3つ以上の都市の地下クラブで、ドラッグショーを開催する性的マイノリティのコミュニティに関わり、交流してきた。こうした経験はBさんにとって、大学の授業で得た知識を批判的に捉える機会となった。

大学でジェンダーの授業で勉強して(…)知識を批判することの意義を教えてくださいました。でも、批判の理論も無論大事だけれど、実際に生きる人々にとって、それだけでは何もならないでしょう。コミュニティに関わってからいろんな人と話してきて、社群¹²⁾という概念の重要性にますます気がつきました。(…)みんなにパワーを与えるような社群を作るの方が重要。理論だけにフォーカスすることの限界というものに本当に気づかされました。実際に人々は何をやっているのか、そこを見ないと、と思いました。(…)理論は私たちに何をもたらしているのか、その地域に合わせてどういうことができるのか。

Bさんの事例が示すのは、中国のドラァグコミュニティとの接触によって、日本で学んだ知識と理論のあり方を問い直す過程である。その過程では、「実際に生きる人々」への関心から、Bさんに二つの気づきをもたらした。それは、第一に、エンパワーする「社群」の重要性と、第二に、地域の特徴を重要視した理論のあり方である。さらに、これらの気づきは、出身国と移住国の間の往還的移動によって得られたものである。Bさんは、中国と日本を行き来しつつ、出身国のコミュニティの実践から気づきを得て、移住国での経験を捉え直した。この事例は、性的マイノリティの留学生が移住国で知識に触れることが単なるエンパワーメントの側面を超える可能性を示唆している。移住国での学びを念頭に置きつつ、出身国で見聞きした経験に触発されて、移住国での経験を批判的に捉え直す過程は、性的マイノリティの留学生における経験の両義性を示している。

3.2.2 社会運動への関与からみる問題意識の形成

本項では、性的マイノリティの留学生が、日本で性的マイノリティの運動に参加する経験を取り上げ、日本の運動に対して批判的の眼差しを向ける事例を論じる。

聞き取り調査の場面では、日本で行われる「彩虹游行」¹³⁾、すなわち「プライドパレード」への参加をめぐる経験が頻繁に語られた。「プライドパレード」(以下：パレード)の起源は、1969年アメリカのストーンウォール・インにおける暴動を契機とし、以降性的マイノリティの存在の可視化と差別解消を要素とする社会運動として発展してきた(本田 2023)。日本では、1980年代後半から90年代に入り、性的マイノリティが「普通」であるというイメージを広く認知させるための運動がなされており、その流れの中、1994年にはパレードが初めて行われた(堀川 2016: 74; 本田 2023: 42)。

パレードに参加することで、日本に在住する中国人性的マイノリティのコミュニティとつながることができる。Aさんはこの経験を話している。

去年の「彩虹游行」に参加しているとき、コミュニティがあることに気づきました。<どういうコミュニティ？>みんなは性的マイノリティの女性で、よく集まっている印象です。<そのコミュニティで集まる時何をしていますの？>コミュニティで何かの行動を起こしていくことについて話しています。SNSでアカウントがあります。

Aさんが見せてくれたSNSのアカウントは、Aさんによるとコミュニティに

よって運営されている。そのアカウントは、欧米諸国を拠点に置く中国フェミニストの情報発信、講演イベントなど、グローバルに展開しているジェンダーとセクシュアリティの 이슈の広がりを提示し、中国語、日本語、英語で投稿している。Aさんは「みんな一人一人がとても好きで、連絡をとっていきたい」と語り、コミュニティのつながりを大事にしている。

中国人性的マイノリティのコミュニティとつながる機会がある一方で、パレードという運動の形式に疑問が付されることもある。Fさんは、ゲイ男性である自身の経験を述べつつ、パレードに参加したとき「少数者の文化はなんだか、多数者のものになったという感じ。あとパレードいくと、男しかないいでしょ。パレードね、もう違うものになった感じ」と感想を語った。Fさんは、性的マイノリティの文化が主流化し、多数派に領有されるようになるにつれ、ますます商業的なものになる恐れと、ゲイが最も可視化されている運動の現状を批判的に捉えていた。同様に、日本の地方都市I市のパレードに毎年参加するBさんは、これまでの経験を振り返った。

パレードはスタッフに「お気をつけて」と言われながら決まったコースで歩くものだから、なぜ歩くのは私たちなんだろうといつも思いました(…) 見せ物にされているように思えて、犬の散歩に連れられているような感覚でした。(…) 今年は何で「戦争反対」と「貧困をなくす」を書いた看板を掲げた人が、スタッフから看板を下げるように、「やめてください」と言われたのを見て、不思議でした。LGBTQもみんな少数派なのに、戦争反対と貧困者とも一致団結するものかと思っていたから。(…) 日本のパレードはまだ限定的だと思いました。

このようにマイノリティの側が、秩序を守りながら、訴えるという運動の形式と、「LGBTQ」の 이슈のみに限定するI市のパレードのあり方に対して、Bさんは批判的な眼差しを向けた。さらに、中国に度々帰り、ドラッグアーティストが中心となる性的マイノリティのコミュニティに接触してきたBさんは、日本のパレードで目にした当事者の自己表現には「地域化」に欠けると認識した。その認識の背景には、ドラッグのコミュニティから受けた自らの感触がある。

一人の演者は、西洋スタイルのショーをやるときにも、「春晚」(引用者注：春節を祝う中国伝統的なテレビ番組)の曲をやって、民族性のあるスタイルに変えているんですよ。しかも、「双喜臨門」と書いた門聯(引

用者注：「めでたいことが重なる」意味で、春節のときに飾る伝統的行事）を身につけて。それは言い換えれば西洋スタイルとは真逆のやり方で、西洋のものを地域化しています。この地域化はとても重要。

ドラッグショーは、パフォーマンスを通してジェンダーをめぐる固定観念を攪乱する実践である。Bさんによれば、中国で自身が接触したコミュニティとは、「地域化を取り入れた」、「クィアが自己表現を行う場」であった。Bさんが「地域化」を強調する背景には、国家が性的マイノリティの運動と思想を西洋由来のものとして取り締まることがある。ドラッグもその例に漏れず、西洋に起源をもつパフォーマンスとみなされる。ドラッグを演じる当事者はその圧力を認識し、自らが「愛国的」であると証明するために、中国の伝統的な民族文化を取り入れる戦略を練り出している。Bさんは、このように民族文化の要素を組み入れる「中国のドラッグショー」はまさに国家のナショナリズム・イデオロギーに呼応し、ショーを正当化する効果がある一方で、「一見迎合戦略だったものが新たなスタイルを生み出して、希望を感じるときもある」という。すなわち、「地域化」の戦略はBさんにとって、中国における性的マイノリティが単に政治と折り合いをつける戦略であることを超え、自らが確立する新たなスタイルとして「希望」ともなる。こうした思いから、日本のパレードに参加し、当事者の自己表現のパフォーマンスを目にしたとき、Bさんは「ただレインボーの要素を身につけている」ことに物足りなさを感じ、「つつい中国の演者だったら、もっと違う雰囲気を出せるのではないかと想像してた」という。ここで、Bさんはあくまでも自身の経験をベースとしながら、中国のドラッグショーを日本のパレードと対比させて語っていることに注意する必要があるだろう。

Bさんが感じた日本のパレードの物足りなさ——中国のドラッグショーと異なり「地域化」が見られず「レインボー」要素のみが表現されることに由来する物足りなさ——の根底には、脱政治化への批判的眼差しが存在している。日本のパレードの戦略を論じた堀川（2016）によれば、2000年以降、多くの人々を動員するために、「楽しさ」を前面に掲げる祭りを通じて可視化を図ってきた。こうした戦略は当初から「政治性のなさ／低さ」が批判されてきた（砂川2003）。こうした運動内部の自省的な眼差しはBさんの語りにも共鳴していると考えられる。

しかし、果たして中国のドラッグコミュニティは完全に政治化されていると言えるのだろうか。聞き取り調査において、Bさんは「温水煮青蛙」という表現で現在の政治状況を喩えた。この言葉は、生きた蛙は沸騰した熱湯ですぐ死

んでしまうが、常温の水からゆっくり沸騰させていくと危険を察知しないまま死亡する現象を表している。Bさんはこの比喻を用いて、性的マイノリティをとりまく政治状況を「温水」、そして性的マイノリティ自身を蛙になぞらえ、「蛙として全力で反抗することが難しくても、温水の中で少しでも最後までもがくしかない」と述べた。この語りが示すのは、中国政治を真正面から問うていくような政治化の姿勢をとることの難しさの自覚である。Bさんにとっては、ドラッグコミュニティによる民族文化表現の戦略が「温水の中でもがく」姿勢である。日本のパレードと対比する形で中国のドラッグコミュニティを語るBさんには、出身国である中国の国家権力との交渉を重ねる性的マイノリティの生存戦略を見てとることができる。

以上見てきたように、調査対象者は、移住国である日本の状況は無批判に受容するのではなく、コミュニティや運動を批判的に捉えていた。とりわけ、脱政治化を指摘したBさんの事例は次の二点を明らかにする。第一に、出身国である中国との往還的移動は、中国の性的マイノリティコミュニティによる交渉の戦略を知る機会となり、その戦略自体がエンパワーメントをもたらすこと。第二に、こうした中国の政治との交渉への思いは、日本の性的マイノリティ運動に対する脱政治化への批判的眼差しにもつながっていること。このように、往還的移動を通じて、性的マイノリティの留学生は、「国家と性的マイノリティ」に関する問題意識を形成し、日本の運動を一方的に受容するのではなく、批判的な視点から捉えるようになる。

3.3 越境的社会空間の形成

本項では、Aさん、Bさん、Dさんの事例を取り上げ、三人がもつ日本の社会運動との関わりに着目する。日本に在住する性的マイノリティの留学生が、性的マイノリティをとりまく中国の状況についての思いを発信し続ける様子から、社会運動に発展しうる越境的社会空間の形成を考察する。

前述のように、日本のI市のパレードの参加を通じて脱政治化に批判的眼差しを向けていたBさんは、さらに、そこで感じとった疎外された気持ちを吐露している。

「彩虹游行」から、すごく「疏離」（引用者注：疎外）していると感じます。私はLGBTQの一員であっても、ここのLGBTQの一員ではありません。ここで訴えられているものも、私が追い求めるものではありません。多くの中国のLGBTQの友達も同じ感触を抱いていて、みんな複雑な気持ちですよ。

Bさんは自分が「ここ」、つまりパレードに集う日本の性的マイノリティコミュニティに属する一員ではないと明確に認識していた。筆者はさらに、その理由を尋ねた。

簡単な理由だけれど、このイベントは中国の社会で行われたものではないからです。中国で開催されるものにはか意義がないと思います。(…)
国家の環境が明らかにLGBTQを排斥しているから、帰属感はありません。ここ(引用者注：中国)は自分の場所、自分の国ではありません。でも一方で、「中国」だというのも、また足枷のように、どこへ行っても「中国人」であることから逃れられません。中国のことを気にしている限り、中国の文化と土地に愛着をもつ限り、その土地で生きる人々の営みを念頭に置く限り、逃れられないです。

この「国家の環境が明らかにLGBTQを排斥」という語りは、前節で述べた国家権力の規制を意識したBさんの危機感を示している。日本のパレードと中国の「国家の環境」双方とも、Bさんにとって帰属感を見出せないが、それぞれの帰属感はまだ、異なる意味合いをもつ。出身国である中国に対する帰属感の欠如は、性的マイノリティを排斥する「国家の環境」への危機感に由来している。一方、「中国で開催されるものにはか意義がない」という語りは、Bさんが中国の性的マイノリティに貢献したいという意志を表している。つまり、日本に対する帰属感の欠如は、日本の性的マイノリティの運動が中国の問題に結びつかないと感じられることに起因している。

中国の国家権力の規制を憂えるDさんも、日本の性的マイノリティコミュニティが中国の問題に関心を示さないことに対する「寂しい」気持ちを語った。

ボランティアしている日本のコミュニティに、中国の性的マイノリティの運動団体が取り締まられたことを話したら、その反応は「なんか大変ですね」と、それで終わり。私はすごく虚しい気持ちになりました。(…)
故郷のことを話すと、反応をくれる人があんまりいません。それですごく寂しい気持ちになります。

Dさんは、聞き取り調査中何度も、取り締まりの問題をめぐって自身の憂いを表明した。日頃日本の性的マイノリティのサークルに出入りしているが、ここでは「故郷」の問題について関心が共有されていないことに、Dさんは失望した。DさんとBさんの事例は同様に、日本のコミュニティや運動に身を置き

ながらも、中国の問題を語る道を模索しようとする性的マイノリティの留学生の焦燥感を物語る。

Aさんも、「中国の文脈」を常に考えている。Aさんはパレードのみでなく、日本のJ地区で行われた反ジェントリフィケーションの地域運動に参加するときの思いを教えてくれた。

イベントに参加するたび、いつも「中国」は全く別の文脈だとわかります。そこにいると、中国が直面している問題とは全く異なることに気がきます。中国の文脈では、そういうことはできません。そのまま中国でやろうとしたらできるわけではないです。啓発は受けるけど、でもどうすれば良いかまだわからないです。

「別の文脈」として語られた際に念頭に置かれたのは、日本と中国の差異である。それは、中国では大規模な集会在展開できないことに現れる。また、Aさんはパレードに参加する中国人性的マイノリティの動機についても、「中国」に対する意識があると指摘した。

パレードへの参加動機というのは、「中国这个点」（引用者注：中国という点）が、実は「性的マイノリティ」であることよりも重要だと思います。「性的マイノリティ」であるというのは、みんなが集まる一つの理由だけれど、最も切実で、しかもみんなが悲しんでいるのは「中国」という点。コミュニティでよく他の人から、海外にいと安全すぎて、中国に帰って行動者になりたいという話を聞きます。

すなわち、日本でパレードに参加するのは、性的マイノリティであること以外にも、パレードの社会運動的特徴を認識したうえで、中国を念頭に置き、同じ問題関心を共有する人々と出会うことが期待される。ヨーロッパの性的マイノリティの移民による社会運動のネットワーク動員を分析したAyoubとBauman (2019: 2785) は、移民は出身国との結びつきを通じて共通のつながりをもつことで、社会運動へと発展しうる集団的アイデンティティを作り出していくと指摘した。Aさんの事例が示すのは、まさに出身国の結びつきとしての中国に対する問題関心が集団的アイデンティティとなり、移住国日本のパレードという場で集結し、社会運動のベースとなるコミュニティが構築されるということである。この意味で、日本のパレードは、性的マイノリティの中国系移民による連帯の形成を可能にしていると言える。

Aさん自身は、出身国との距離に由来するもどかしさがあるものの、「パレードで出会った友人たちのつながりを見て、国家の内と外、双方とも盟友がいることは、互いを支援できるから必要だ」と認識した。「友人たちのつながり」とは、主にジェンダーとセクシュアリティを学び、日本に在住する性的マイノリティの留学生によって構成されるコミュニティのことである。このような越境的つながりを有するコミュニティ形成が重視される姿勢から、性的マイノリティの留学生は今後ますます越境的空間の形成に関与していくことが予想される。このことは、中国人留学生が現代中国における性的マイノリティの政治に必要な越境的な創造的運動（Liu & Rofel 2010; Wang 2021）の担い手となる可能性を示唆している。

おわりに

本稿は、中国出身の性的マイノリティ留学生を対象に、往還的移动によって生じる経験の両義性と越境的社会空間の創出の可能性を論じてきた。欧米諸国への移住事例に偏重してきた先行研究に対し、本稿は、日本における中国出身的マイノリティ移民に光を当てることで、「同性愛嫌悪な出身国からLGBTフレンドリーな移住国」に向かうという定式を相対化する事例を提供した。

まず、移住動機を分析することで、「抑圧から解放へ」という物語に回収されない移動過程の複雑さがあることが明らかになった。また、性的マイノリティの留学生は、日本の大学で知を獲得する機会を得ていたが、往還的移动を通じて、出身国からエンパワーされたり、移住国に対して批判的な眼差しを向けたりする両義的経験をもつ。特に、パレード参加の事例からは、中国の性的マイノリティによる政治的な交渉戦略を見聞きする経験を通じて、日本の運動を批判的に捉えていることが明らかになった。このように、性的マイノリティの留学生が、日本の社会運動に参加しつつ、中国への問題関心から越境的つながりを重視し、社会運動のベースとなるコミュニティ形成に寄与する可能性をもつことも示すことができた。

現代中国における政治状況に鑑みて、社会運動の発展には、越境的つながりが不可欠である。今後は、このような越境的社会空間がいかなる形態で発展していくのかを、日本を含む海外の多様な社会運動とのトランスナショナルな連帯に注目することを通して明らかにしていきたい。

（もう れいさい 一橋大学大学院）

謝辞：本研究の調査にご協力くださった皆様、ならびに有益なコメントを多

く提供して下さった二名の査読者に心よりお礼を申し上げます。また本稿は、JSPS科研費JP23KJ0976の助成を受け執筆しました。

[注]

- 1) 本稿で「移民」という用語を用いる際、その対象に留学生を含める。国際移住機関によると、移民に関する定義は国際法でなされているものではなく、一時的か恒久的にかかわらず、本来の居住地から離れて移動する人々は全て移民とみなされる(国際移住機関 2024)。国際移住研究でも、留学生を移民の枠組みから議論してきた蓄積があり(Liu-Farrer 2020)、本稿もそれに倣うこととする。
- 2) 本稿では移住を、短期／長期的滞在にかかわらず、国境を越える移動および移動にまつわるさまざまな経験を包含して考察する。また、本稿では、非異性愛・シスジェンダーである人々を「性的マイノリティ」と記述するが、先行研究の直訳で「クィア」と表記する場合もある。
- 3) Kam (2019) はモビリティを、国際移動を可能にする資本を有することから捉えている。
- 4) 多重移住とは、複数の地点に移住を行うことである。
- 5) 本稿では被抑圧集団が自ら社会変革を求める運動のあり方を指し示す用語として、社会運動を用いる。だがかつて中国政府が主導した大躍進政策を含め多くの政策を「運動」と総称していた歴史があったため、社会運動をとりまく中国語の文脈には注意が必要である。
- 6) 「同志」とは、狭義では同性愛者、広義ではクィア、性的マイノリティを指し示す言葉である。
- 7) 政治的リスクの回避に応じた本稿の記述方針は、性的マイノリティ内部の差異に焦点を当て、重要視するクィア研究のアプローチから批判されうることを記しておきたい。
- 8) 在日中国人留学生は、モビリティを有することで高い階層に位置しているとみなされう。だが筆者は自身の調査で階層について検証したわけではない点、そしてフィールドワークでは経済的制約があると語られる場面にはしばしば遭遇する点から、留学生は高階層であることについて現時点では留保をつけたい。
- 9) 中国の国勢調査によると、国外で留学したり仕事したりする者は、1982年7月1日の時点には57,000人であったが、1990年7月1日には238,000人まで増加しており、これは人口の0.2%にあたる(坪谷 2008: 42)。
- 10) 中国国内に始まった#MeTooは、2018年に女性学生が実名で中国のSNSでセクシュアル・ハラスメントの被害告発をしたことに続き、多くの証言がなされる

ようになった。#MeTooの参加者は都市部の若い女性であり、嘆願書を作成したり、大学の校長に手紙を送ったりする戦略が採用されていた (Xiong & Dušica 2021)。

- 11) 語りを引用した際の読みやすさを考慮して注釈はそのまま文中に記し、文脈を提示する必要がある場合には、<>の中で筆者の発した質問を書き入れる。
- 12) 本稿は、調査対象者による中国語の「社群」を「コミュニティ」と訳している。聞き取り調査の文脈を考慮すると、「社群」とは、変革を求めるために連帯を育む集団のことである。しかし中国社会の文脈におけるコミュニティは、行政主導に作られた地理的区分である「社区」を指す場合もある。本稿はあくまでも「社群」を意味するコミュニティを考察しているが、両者の区別の検討については今後の研究課題としたい。
- 13) 「レインボーパレード」「プライドパレード」を指し示す中国語である。

【引用文献】

- 青山薫・森千香子 2023 「特集「国境と性——複数の境界線を問いなおす」によせて」『社会学評論』, 74巻3号, 368-377
- Ahmed, Sara. 2010 *The Promise of Happiness*. Durham, NC: Duke University Press.
- Ayoub, P. M. and Bauman, L. 2019 Migration and Queer Mobilizations: How Migration Facilitates Cross-border LGBTQ Activism. *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 45(15), 2758-2778.
- Bao, Hongwei 2013 A Queer 'Comrade' in Sydney: Chineseness, Queer Desire and Homonationalism. *Interventions: International Journal of Postcolonial Studies*, 15(1), 127-140.
- Boyd, A. and Wei, J. 2023 Stretched Kinship: Queer Female University Students Negotiating Family and Identity. *Sexualities*, 0(0), 1-17.
- Choi, S.Y.P. 2022 Global Multiple Migration: Class-Based Mobility Capital of Elite Chinese Gay Men. *Sociology*, 56(5), 946-966.
- 独立行政法人日本学生支援機構 2023 「2023 (令和5) 年度外国人留学生在籍状況調査結果 <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/enrollment/data/2405241100.html> (2024年6月28日最終アクセス)
- D'Emilio, J. 1989 *Gay Politics and Community in San Francisco since World War II*" Duberman, M., Vicinus, M. and Chauncey, G. eds., *Hidden from History: Reclaiming the Gay and Lesbian Past*. New York: Penguin, 456-473.
- Faist, T. 2000 *The Volume and Dynamics of International Migration and Transnational Social Spaces*. Oxford: Oxford University Press.

- Gorman-Murray, A. 2007 Rethinking Queer Migration through the Body. *Social & Cultural Geography*, 8(1), 105-121.
- 2009 Intimate Mobilities: Emotional Embodiment and Queer Migration. *Social & Cultural Geography*, 10(4), 441-461.
- Guo, L. 2018 Moral War: Moral Governance and Tongzhi Activism in China. *Gender and Sexuality*, 13, 85-110.
- 堀川修平 2016 「日本のセクシュアル・マイノリティ運動の変遷からみる運動の今日的課題——デモとしてのパレードから祭りとしてのパレードへ」『女性学』, 23, 64-85
- 本田杏子 2023 「社会運動から Ally/アライを再考する——東京レインボープライドを事例に」『社会デザイン学会学会誌』, 15, 42-51
- Kam, L. 2013 Shanghai LaLas: Female Tongzhi Communities and Politics in Urban China. Hongkong: Hong Kong University Press.
- 2019 Coming Out and Going Abroad: The Chugo Mobility of Queer Women in China. *Journal of Lesbian Studies*, 24(2), 126-139.
- Knopp, L. 2004 Ontologies of Place, Placelessness, and Movement: Queer Quest for Identity and their Impacts on Contemporary Geographic Thought. *Gender, Place, and Culture*, 11:121-134.
- 小井土彰宏 2005 「グローバル化と越境的社会空間の編成——移民研究におけるトランスナショナル視角の諸問題」『社会学評論』, 56(2), 381-399
- 国際移住機関日本 2024 「移住（人々の移動）について」<https://japan.iom.int/migrant-definition> (2024年6月28日最終アクセス)
- Kong, T.S.K. 2011 Chinese Male Homosexualities: Memba, Tongzhi and Golden Body. Abingdon: Routledge.
- Kovrigin, N. 2013 Chinese Migration to Russia and Japan after 1978 and the Role of State Policies: A Comparative Study. *Journal of Asia Pacific Studies*, 3(2), 212-244.
- 工藤晴子 2022 『難民とセクシュアリティ——アメリカにおける性的マイノリティの包摂と排除』明石書店
- Liu, P. and Rofel, L. 2010 Beyond the Strai(gh)ts: Transnationalism and Queer Chinese Politics. *Positions*, 18(2): 281-289.
- Liu-Farrer, G. 2020 Immigrant Japan: Mobility and Belonging in an Ethno-nationalist Society. New York: Cornell University Press.
- Luibhéid, E. 2014 Sexuality and International Migration. Buffington, R. Luibhéid, E. and Guy, D. eds. *A Global History of Sexuality: The Modern Era*. New Jersey:

- Wiley Blackwell, 119-150.
- 孟令齐 2022 「中国における国家ガバナンスと性的少数者——二重のイデオロギーに直面して生きること」一橋大学社会学研究科2021年度修士論文
- 木懐琴 2014 「困境与出路—中国草根NGO現状調査」『中国研究』, 1, 12
- 大井由紀 2006 「トランスナショナリズムにおける移民と国家」『社会学評論』, 57(1), 143-156
- Parker, R. 1999 *Beneath the Equator: Cultures of Desire, Male Homosexuality and Emerging Gay Communities in Brazil*. New York: Routledge.
- Povinelli, E. and Chauncey, G. 1999 *Thinking Sexuality Transnationally: An Introduction*. *Journal of Lesbian and Gay Studies*, 5(4), 439-450.
- Rubin, G. 1993 *Thinking Sex: Notes for a Radical Theory of the Politics of Sexuality*. Ablove, H, Barale, M and Halperin, D. eds. *The Lesbian and Gay Studies Reader*. London: Routledge, 3-44. (=1997, 河口和也訳, 「性を考える——セクシュアリティの政治に関するラディカルな理論のための覚書」『現代思想』青土社, 25(6), 94-144.)
- Schiller, N G, Linda G. B. & Cristina S. B. 1992 *Towards a Transnational Perspective on Migration: Race, Class, and Nationalism Reconsidered*. New York: New York Academy of Sciences.
- 砂川秀樹 2003 「レズビアン&ゲイ・パレードが与える希望」『神奈川大学評論』, 45, 100-106
- 坪谷美欧子 2008 『「永続的ソジョナー」中国人のアイデンティティ——中国からの日本留学にみる国際移民システム』有信堂
- 田中ひかる 2018 「現代の社会運動とその特徴——国境を越えた拡散と共鳴」田中ひかる編『社会運動のグローバル・ヒストリー——共鳴する人と思想』ミネルヴァ書房, 1-27
- Wakabayashi, K. 1990 'Blind Movement' of Chinese Population: Background for the Recent Influx of Chinese Working Students and Disguised Refugees into Japan. *Journal of Population Problems*, 46(1), 35-50.
- Wang, S Y. 2021 *Unfinished Revolution: An Overview of Three Decades of LGBT Activism in China*. *Made in China Journal*, 6(1), 90-95.
- Wetson, K. 1995 *Get Thee to a Big City: Sexual Imaginary and the Great Gay Migration*. *A Journal of Lesbian and Gay Studies*, 2(3), 253-77.
- Wong H. TH, Mao L. and Aggleton P. 2021 "You Can Reject Me; I Can Also Reject You" : Intersections of Migration, Race/Ethnicity, and Sexuality among Chinese Diasporic Gay Men in Australia, Zhou Y R, Singding C. and Goellnicht

- D. eds. *Sexualities, Transnationalism, and Globalization: New Perspectives*. London and New York: Routledge, 32-45.
- Xiong, J and Dušica, R. 2021 #MeToo in China: How Do the Voiceless Rise Up in an Authoritarian State?. *Politics & Gender*, 17(3): 490-499.
- 張秀明 2001 『国際移民体系中的中国大陆移民——也談新移民問題』「華僑華人歷史研究」, 1, 22
- Zheng, H. 2022 “The Pandemic Helped Me!” Queer International Students’ Identity Negotiation with Family on Social Media in Immobile Times. *International Journal of Cultural Studies*, 26(6), 714-731. (2024年9月15日掲載決定)

Formation of Transnational Social Spaces:

Focusing on the Social Movement Engagement of Queer Chinese
International Students in Japan

MENG Lingqi

(Hitotsubashi University)

This study draws on data from semi-structured interviews to investigate the experiences of Chinese queer international students residing in Japan who are actively engaged in social movements. First, with regard to migration motivations, the findings indicate that their involvement in grassroots movements in China forms part of a continuum of experiences that extends into their time in Japan. Second, their interactions with Chinese queer communities reveal a process of ambivalence, leading to critical reflections on their experiences in Japan. By using the “Pride Parade” as a case study, this paper demonstrates the critical perspectives these students hold towards social movements in Japan. Through an analysis of the strategies employed by Chinese queer communities to navigate political engagement, this paper explores their heightened political consciousness and their critique of Japanese social movements. The findings suggest that a transnational social space is created through civic engagement with the notion of “China”.

Queer migration studies have primarily focused on migration cases involving Western countries, by focusing on queer Chinese international students in Japan, this paper challenges the conventional narrative of migration as a linear progression “from oppression to liberation” and provides new insights into the complexities of queer migration.

Keywords: sexual minorities, China, transnational social space, social movement, queer migration